分の重畳を許されていた。

(三) 伊勢神宮の権禰宜の極位は正四位上であったから、医官としては最も高い官位を得たものが多い。

(四) 常顕は徳川家康の扶持を受けた最初の医師である。

(五) 前項の結果、江戸時代には三河譜代直参の格を誇った。

(六) 武家諸法度の埒外の扱いをうけた。

(七) 徳川幕府からうけた祿高は最高で、左京家は二千石、式部家は三百石、内蔵允家も三百石で、三家合わせて二千六百石であった。

(八) 医官ではあるが、もともと武官であるため、任官の場合、法印、法眼のような僧位を受けることはなく、従五位下諸太夫に任官した。

五、心残りなこと

昭和三十九年九月十一日の例会で講演した折、故石原明博士から次のような追加発言をいただいた。

「享祿二年（一五二九）、常辰（二十歳位）は『頓醫抄』五十巻を書写した。同書は現在内閣文庫に蔵されているので、もし私共の系図等に記載がないなら、是非追記する価値がある」とのことであった。

同文庫を調べたが、確かに五十巻の『頓醫抄』は存在し、室町写本とまでは判明したが、常辰の写本なりや否やが断定できずに終ったことである。

日本医学校と女性医師の先駆者たち
——日之出會の人びと

横川弘蔵

一、女性医師養成機関としての日本医学校

私立日本医学校は、明治三十六年八月の済生学舎廃校により同年九月設立された旧済生学舎同窓医学講習会〔石川清志（一八五四～一九一四）主宰　男子のみ〕から分かれた医学研究会〔川上元治郎（一八六四～一九一五）主宰　桂秀馬（一八六一～一九一一）会長　男子のみ〕を磯部検三（一八七二～一九四九）が引継ぎ明治三十七年四月十五日　神田区美土代町二～一東京医師クラブ講堂で開校〔校長　山根正次（一八五七～一九二五）〕した。一方、石川清志の同窓医学講習会は、明治三十七年三月　私立東京医学校と改称し、同年四月十五日本郷区駒込千駄木五九の校舎で、授業を開始した。両校共、男女共学で、授業は、前期（基礎）二年、後期（臨床）二年の正科の他、臨床講習会を併設、「日本医学」「東洋医事新報」（東京医学校）を機関誌とした。明治四十三年四月　両校は合併、私立日本医学校となった。以上日本医学校、東京医学校（創立時併合した女子医学研修所を含む）に於ける女子医学教育は、明治三十四年～四十五年の十二年間で、済生学舎の十六年を加えると二十八年に及ぶ。この間医師養成機関に学んだ女子生徒の正確な人数を算出することは難しいが、済生学舎に数百名（推定）、私立東京医学校に五十余名、私立日本医学校

には、四百名弱と推定する。同四十五年七月　日本医学専門学校への昇格に伴う女子生徒募集中止までの約九ヶ年、正科に延べ二九八四名（前期一八二一名、後期一一六三名）の女子生徒が在学していた。その入学第一号は、明治三十七年四月　後期生徒として久恒静枝（大分県生、明三九・七医師登録）・油川太嘉（滋賀県生、明三九・七登録）・小池（荒井）アサ（福島県生、大五・一登録）の三名であった。

二、同窓女性医師たち—日之出會の人びと

荻野ぎんが女性として医師登録をうけた明治十八年より、新医師法（明治三十九年五月制定）が施行された大正五年秋（医師登録は大正六年）までの三十二年間、旧医術開業試験合格により医師（籍）登録をうけた女性は、総数で五二〇名に及ぶ。この内訳を出身校別にみると、私立日本医学校（含私立東京医学校）は一七二名で、女子在籍者の三分の一が医師となり、これは全女性医師の約三分の一にあたる。

昭和九年七月二十五日（水）午後六時から東京本郷の「鉢の木」で、日本医学校に学び医師となった女性達のはじめての集い（出席者　在京者中心で十二名）があった。発起人大貫セツ、幹事杉田つる。当日この女性医師同窓会を日本医学校の頭文字から「日之出會」と名付け、以後全国の女子同窓生に呼びかけ、昭和十八年頃まで毎年会合がもたれた。以下、日之出會会員を中心に、わが国女性医師の先駆者たちのうち数名を選びそのプロフィールを述べる。（医師登録順）

1　水江（旧姓北村）しづ（一八八四～?）

明治十七年三月　山口県三田尻（現防府市）生、私立三田尻病院（院長神徳一人）看護婦学校を経て、明治三十四年一月東京女医学校に入学、二ヶ月在学の後、女子医学研修所に移り、関西医学院から日本医学校に学ぶ。明治三十八年七月　医師登録。日本医学校助手から東大外科教室に入局（近藤次繁教授、直接指導は塩田廣重助教授）、明治三十九年五月　田代義徳教授整形外科教室創設に伴い整形外科に移り介補となる—女医介補第一号。同四十四年四月三日、第十二回日本外科学会で田代教授の「成人ニ於ケル内飜馬足ノ療法」の講演に追加発表（乳児先天性内飜足ニ対スル矯正・後療法ノ注意）—女性医師の学会発表第一号。同四十三年東大より泉橋慈善病院に移り耳鼻咽喉科を修める。日本医学校臨床講習会助手、附属医院芝分院主任（油川太嘉の後任）をつとめる。大正十一年より日本医学同窓会評議員。大正十二年まで東京で、大震災後、横浜に移り耳鼻咽喉科を開業。昭和十一年から日本女医会評議員。

2　油川太嘉（一八七九～一九一〇）

明治十二年二月　滋賀県甲賀郡水口生、医師を志し、先ず滋賀県赤十字支部の看護婦となり、大阪市桃山病院看護婦長をつとめる。明治三十三年より大阪慈恵医院医学校、関西医学院に学ぶ。その間学費捻出のため「八種伝染病看護法（前・後編）」を著す。次いで、同三十七年　日本医学校に学び、同三十九年七月　医師登録、日本医学校助手、附属医院芝分院（芝区柴井町）主任となる。明治四十一年　医術開業試験に細菌・衛生学が加えられることとなり、長澤米蔵氏と共に東大衛生学教室横手千代助教授のも

とに国内留学を命ぜられる。帰学後に顕微鏡実習を担当、明治四十三年十月　千葉県大原で病歿、故郷滋賀県水口町本正寺に眠る。

3　杉田つる（一八八二～一九五七）

明治十五年十二月　神戸市仲町に生る。祖父杉田玄端　父雄（いさを）。杉田玄白より六代目、湊川小を経て明治三十八年二月関西医学院入学、同三十九年九月　日本医学校に転じ、同四十二年一月医師登録、同年五月　東大小児科学教室（弘田長教授）研究生（介補嘱託―となる―翌四十五年より児科雑誌の編輯、大正五年からX線係をつとめた）、同四十四年二月本郷区本郷二―一四の自宅で小児科開業、同年十一月　日本女医会に入会。大正二年六月　「日本女医会雑誌」創刊され、発行責任者となる。以後昭和十九年九月の終刊（一一八号）まで務める。その間、自宅は大正十四年から日本女医会の事務所となり、昭和二十年三月　戦災により焼失するまでつづく。大正八年　東大小児科の医員、同九年日本女医会評議員、大正十一年　日本医学同窓会幹事、昭和十五年五月　日本女医会副会長、同年八月　学位受領（東大）、学位論文、バルロー氏病（ビタミンC欠乏症）の臨床的研究（児科雑誌）、昭和二十一年三月　国立東京第一病院二宮分院（旧戦災孤児のための相模保育所）の主任医師として勤務、昭和三十二年四月二十日逝去、東京青山墓地に眠る。クリスチャンで、窪田空穂門下の歌人であった。

4　鈴木（旧石川）松枝（一八八六～一九一八？）

明治十九年一月　新潟県中頸城郡斐太村（現新井市）生。小学校教員を経て、明治四十年四月　日本医学校入学、同四十二年三月　卒業（首席）、同年十二月医師登録、郷里（新井町）で開業後、日本医学校附属医院に勤務、同四十四年　在米邦人の招きで渡米、同年秋結婚、その後離婚、大正七年（？）アメリカで自殺したという。

5　風間たね（一八八五～一九五一）

明治十八年一月　山梨県甲府市生。山梨英和女学校を経て女子医学研修所、日本医学校に学ぶ。明治四十四年二月医師登録、同年　田中達三郎（東京市京橋に開業）のもとで耳鼻喉咽科・内科・皮膚科を修め、麹町に開業、昭和十二年　日本医科大学病理学教室（福士政一・長澤米藏教授）研究生となり、同十三年四月学位受領（日本医大）、学位論文　色素性母斑ノ組織学的研究（日本医科大学雑誌）―女性医学博士の二十番目で、女性として日本医大で初の、そして母校より学位受領第一号である。昭和二十六年十二月逝去。

6　多川（旧池内）すみ（一八九〇～一九五五）

明治二十三年九月　愛媛県松山市生。伯父に池内信嘉、叔父に高濱虚子。明治三十年上京、芝区鞆絵小学校、府立第三高女（麻布日ヶ窪在、現都立駒場高）から　明治三十九年五月東京女医学校入学、同四十一年三月　日本医学校に転校、同四十四年三月医師登録、同年より東大小児科弘田長教授の指導をうけ、婦人共立育児会病院（麹町飯田町）に勤務、傍ら芝区南佐久町一―一の自宅で開業、明治四十五年三月　日本女医会に入会、大正二年三月日本女医会機関誌の発刊の相談を前田園、杉田つるとの三人で行う（於・牛込の前田宅）。同年六月、「日本女医会雑誌」創刊さ

れ、編輯責任者となり、編輯・発行所を自宅におく。以後昭和十九年九月まで編輯人をつとめる。大正三年結婚、同六年、芝区白金三光町に移転、開業(産婦人科・内科・小児科)、同九年より日本女医会評議員、昭和十一年　日本女医の祖「荻野吟子」(戯曲)、同十二年三月　日本女医五十年史年表(草稿)、同年八月　先輩名簿、を各々日本女医会雑誌に発表、同十八年一月から医事公論女医に日本女医五十年史に執筆・発表(未完)。この他、荻野吟・生澤久及・高橋瑞子・石黒忠悳の訪問記等、親友杉田つるとの名コンビで、先駆者達の足跡を正確かつ多彩に綴った功績は枚挙に遑がない。昭和三十四年十月　病を得て逝去、東京谷中霊園に眠る。俳人として「みすゞ会」を主宰した。

(付)日本女医会　明治三十五年四月　前田園(済生学舎卒)により創立(第一回例会幹事　前田園・塚原雄子)　大正二年六月機関誌「日本女医会雑誌」を発刊、大正八年九月　第一回萬国女医会議(ニューヨーク)開かれ、井上友子代表として出席し、この時設立された萬国女医会に加盟す。大正九年四月　会長・評議員を設け、会長吉岡弥生。昭和十一年五月　日本女医公許五十周年の記念式典・資料展を行う(於・上野精養軒)。

なお、戦後昭和二十七年十一月　日本女医会は再発足した。

7　その他、日本医学校の助手(無給)として、山田(善行寺)玉興・綾井(種坂)章江・三塩(安部)スミ・福井良子が務め、日本女医会には、大貫(内田)セツ・島峰(菅野)いちが評議員として活躍した。

第7回北陸医史学同好会

昭和六十年七月十四日(日)

一、楢林健三郎の墨蹟と翻訳書　正橋　剛二　松田　健史

二、資料紹介と展示

(一)　南保家書翰等　難波　恒雄　植村　元覚　宗玄　明

(二)　高岡市医師会記念誌　野尻　功　石坂　栄造　正橋　剛二

(三)　滑川東北部人物風土記　松田　健史

三、館玄龍、佩刀の脇差　館　秀夫

四、向井元井撰「庖厨和名本草」　加藤　豊明

五、半井南陽先生の漢詩について　岩治　勇一

六、水野朗製作の医人塑像について　寺畑　喜朔

(特別講演)

半井家について　富山大学名誉教授　高瀬　重雄

七、北陸地方における牛痘法の普及について　正橋　剛二　松田　健史